

(報告書)

熊野の葉巻文化と嗜好品からみる農村女性の労働と楽しみ

助成研究者 湯崎 真梨子(和歌山大学産学連携イノベーションセンター)

1. 研究目的

紀伊半島の熊野地域は、海岸近くまで山が迫り、その山奥深くまで集落が点在し、近年まで貧しい山間僻地と語られてきた。熊野の女性たちは、急峻な山肌や狭隘な耕地で過酷な労働に明け暮れ、それは「本当につらい日々だった」と語られるものである¹⁾。熊野にはツバキの葉を煙管がわりにした独特の煙草が存在した。ツバキの葉巻は特に女性たちに愛飲され、農作業の間にも井戸端会議の場でも欠かさなかったとの証言がある。

本研究では、熊野地域を対象に、文献やインタビューにより熊野女性に独特の嗜好行動であった喫煙文化を調査し、喫煙の背景である女性の日常を明らかにする。同時に、嗜好品も拾い出し、生活の中から生まれた楽しみの実像を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、文献調査とインタビュー調査により、ツバキの葉を使った喫煙風習が熊野を中心としてどのように分布していたかを整理し、背景となった農山村女性の労働と生活の実態を記録した。インタビュー調査は、和歌山県熊野エリアの西牟婁地域、東牟婁地域を中心に文献に現れた土地やその周辺を中心に現地で実施した。調査データは、ツバキなどの葉による喫煙行動があった集落地点毎に地図上に整理し、その分布と地域間の関連性を視覚的に明らかにすることを試みた。

なお、予備調査の段階で、ツバキの葉巻きによる喫煙経験を持つ女性はほぼ生存しないことがわかった。また、市町村誌や郷土誌など地域文献では、ツバキの葉巻についてわずかな記述はあるものの、具体的にまとまった資料を確認することができなかった。したがって、本研究では、実際に現地を訪ね、喫煙者と接点を持った記憶のある高齢者へのインタビューおよび文献調査により研究を進める方法をとった。

ツバキの葉を使用した煙草は、葉を煙管代わりにしてきざみ煙草を巻き込んだものであるが、その他の葉を使用したものを含め、本研究では「柴巻」と表記する¹⁾。

3. 研究成果

¹⁾柴(しば)とは熊野の方言で木の葉のことで、木の葉に巻いた煙草は「しばまき」と呼ばれていた。

3-1 調査地の概要

①熊野

熊野とは、紀伊半島南部の地域でかつての紀伊国牟婁郡のことをいう。紀伊国は明治時代になって、熊野川を境に和歌山県、三重県に分けられた。現在の和歌山県東牟婁郡、西牟婁郡、三重県の北牟婁郡、南牟婁郡の地域にあたる(図1)。

熊野三山を有する熊野には、院政期、上皇や貴族らによる熊野詣が盛んに行われ、熊野は浄土信仰の地としての地位を確立した。梅原猛は、「クマノ」とはアイヌ語の語源との関連から、「暗い霊のいるところ」の意味であろうとしている²⁾。都から遠く、幾重にも連なる深山を超えて到達する聖地のイメージは今に至っている。しかし、生活の場所となると南海に孤絶し山塊に阻まれた僻地であった。

柴巻は、まさにそのような地域における習俗であった。

②旧大塔村に見る昭和初期の熊野の山村

柴巻喫煙のあった地域の象徴的な概観として、昭和初期の旧大塔村の概要について「三川村郷土誌」(昭和5年発行)より抜粋する。旧大塔村は、2005年の合併で田辺市となった。熊野地域最高峰の大塔山を中心とする大塔山系の約半分が旧大塔村に含まれる。



図1. 熊野エリア

Wikipedia⁵⁾を元に筆者作成

前の川の上流に当り高尾，大塔，法師，黒藏などの高峰峻嶺を以て圍繞(いじょう)せられて其の中に一小盆地をなせるは大字木守にして，熊野川の溪流に沿ふて面川，熊野の2大字あり，熊野より西キンカツギの嶮を超ゑたる所に大字西大谷あり，150 数戸の住家は其の間に点在す…富里村より半作岑を越ゑて豊原村に通ずる嶮路を俗に辭職坂といひ，大字熊野より大字西大谷に越ゆる坂をキンカツギといふ³⁾

当地の僻地ぶりを表すものとして「辭職坂」の単語がある。山奥に赴任する教師や巡査が，その険しく長い急坂に「辞めて帰ろう」と思案し辞職を決心したというのが語源で，辭職坂や辭職峠の俗称で全国に存在している⁴⁾。キンカツギとは急な坂の峠道につけられた全国各地にみられる俗称である。半作嶺(はんさみね)は険しい上り坂が続く難所で，前に下がる男性器までも重く感じられ，手で担ぎたくなる気持ちを表している。

このような険しい山塊に阻まれた集落は，現在も公共交通の整備が十分とはいえず，

くねくねとした山道の奥に点在する山間僻地である(図2)。

3-2. 文献調査による柴巻習俗と女性労働

① 熊野紀行文などによる柴巻習俗

柴巻について記録された古いものでは、寛政10年(1798年)の林信章の『熊野詣紀行』の中の一節がある²。

熊野路はすべて煙草を呑むにきせるを用ひず、木の葉、かづらの葉など巻て、口にくはえながら往来する⁵⁾。



図2. 半作嶺を望む

*「辞職峠」であり「乙女の寝顔」の異名をもつ
出所:筆者撮影

本宮町(現田辺市本宮)渡瀬あたりを通った時の描写で、聞くと、「山仕事や農作業では煙管で喉を突く危険性もあるし、葉で吸うのはなによりも味がよい」(筆者意識)と語った、とある。ここでは、特にツバキを指さず、木の葉、かづらの葉などに巻くとしている。

『紀伊続風土記』を編纂した加納諸平の歌集『柿園詠草』では、熊野巡検の際に「椿の巻葉」についても詠んでおり、これは天保初年(1830年)作とされる

山がつかげぶり吹きけむ跡ならし椿の巻葉霜にこほれり

山の民が煙草を吹かした跡らしい、ツバキの巻葉が霜に凍っている(筆者意識)と詠んだ。さらに江戸期の文人たちの紀行文にも柴巻についての記述を見ることができる。

煙を噴くに管を用いず、木葉を巻きて之に代ふ(菊池元習『三山紀略』(原文漢文)、享和2年(1802))

これは、周参見から見老津への途中で、村婦が薪を頭上に戴くのを見かけた後とある。周参見から見老津への途中というのは、熊野古道の大辺路街道の峠道の辺りと推察される。周参見の奥の集落から峠を越え見老津に下りる古道からは潮岬を眺望することができ、今は世界遺産にも指定されている絶景である。

²『熊野詣紀行』『柿園詠草』『三山紀略』『南遊志』『在郷日記』からの引用は杉山浩一郎『熊野の民俗と歴史』清文堂出版、1998年、202-204頁を参照した。

婦人有り役に充つ。頭に行李を戴き、口に烟管を含む。管は木葉を巻きて之を為(つく)る。熊中の山民皆然り(斎藤拙堂『南遊志』(原文漢文), 万延元年(1860))

これは、新鹿(あたしか)から二木島(現三重県熊野市)への峻坂を越えるあたりの描写とある。また紀伊藩の史料集をまとめた堀内信は、明治3年(1870)に北山組を巡視し、その様子を記している。

村々檠灯なく、松の脂木を割りて焚て灯火となす。喫烟に烟管を用ひず、椿の葉をまき代用甚巧み也り(堀内信『在郷日記』, 明治3年(1870))

これらの江戸末期から明治初期の文献からは、険しい山間の集落で口に柴巻を咥え、頭上に薪や行李を戴き運搬し立ち働く熊野の女性の姿がわかる。また、北山組は現在の和歌山県の北山村のあたりで、近年でさえ県都から非常に遠い飛び地の村である。

さらに、柴巻の習俗があった場所の特定が可能な文献としては、佐藤春夫の『山妖海異』がある。「さとり」の話の中に以下の一節がある。

シバ煙草というのは熊野に特有の風習で、椿の若い葉の葉柄を軸にして刻み煙草を巻き込んだもので、吸いながら外に散らないで燃えにくい椿の葉のなかにつつまれ残るために山火事を防ぐに足りるし、また椿の葉に特有の香気が煙草を味よくするといって熊野の山人たちはこれを愛用するのである⁶⁾。

『山妖海異』は紀伊長島にまつわる伝承を、佐藤春夫自らの語り口調で紹介する民話集で、その舞台は三重県南部の赤羽川から熊野地方一帯である。

また、三重県に残る文献では、三重県内21郡の習俗を取りまとめた「各郡習俗慣例取調書」(1883年)の中に椿の葉に関する婦女子の喫煙習俗の記録がある(図3)。

農漁其他動力ニ従事スルモノ、吸烟ハ、大概椿ノ葉ニ疎切之烟草ヲ巻キ、之ヲ口ニ加ヘタル俣各業ニ従事スル等、当郡ノ慣例ナリ⁷⁾

さらに、井上円了は『日本周遊奇譚』の中で、椿葉を用いた喫煙は、熊野、五島でもされていると書いている。

紀伊の熊野地方と肥前の五島^{みいらく}三非楽地方とは烟管を用いず、その代わりに椿葉を用い、之に烟草を巻込、巻烟管のごとく吸入する風である。其の両所とも婦人が皆喫

煙して居る。是は烟管を用いさる昔の風を伝えて居るのであろう⁸⁾。(旧漢字を修正)

また、九州の長崎県の漁業集落式見(現長崎市式見町)では、かつてツバキの葉できざみを巻いて煙草を吸う風習があった。江戸時代以前に、式見が熊野の漁民が進出して開いた漁村であるとの伝承が昔からあり、熊野から漁業と共にツバキの葉による女性の喫煙が伝わったことが確かとされている⁹⁾。

② 柴巻と「いただき」労働

ツバキの葉の柴巻について、南方熊楠が「紀州俗伝」で以下のように記している。

「熊野に遊んだ人は熟知るが、潮見峠より東では古来山茶の葉で煙草を捲き吸、木板を頭に載せ山路を通う婦女殊に然り、手づから捲て火を点ける手際、他所の人倣し難い。齒無き老婆など、件の葉捲を無患子の孔に管所たるに挿て吸い歩く、其山茶葉に好悪有て、選択に念入れ、路傍の一文店で列で売る、古い狂歌に「熊野路は烟管無ても須磨の浦、青葉くわえて口は敦盛」¹⁰⁾。(現代漢字と仮名遣いに筆者変更)

山茶とはツバキのことである。頭に木板を載せて木の皮など林産物を運ぶことは熊野の女性の風俗であった。無患子とはムクロジのことで、黒く丸い玉のような実があり、それに穴を開けて椿の葉巻を挿してしゃぶりながら吸ったということだろうか。

潮見峠は、熊野参詣道において熊野の霊域の入り口とされた現在の田辺市中辺路町の入り口に当たる峠で、登りも下りも非常に険しい峠である。この潮見峠を、ツバキの柴巻の西端と記している。

また、昭和10年(1935年)の映画「熊野路」では、68歳の熊楠の姿が撮られているが、別シーンには手ぬぐいをかぶり野良着姿で柴巻を吸う女性の姿が撮影されている¹¹⁾(図4)。

先に引用した「紀州俗伝」の一節に「木板を頭に載せ山路を通う婦女」とあるが、これは「いただき」と呼ばれる頭上運搬である。前項で記した菊池や斎藤の紀行文には険しい峠を頭上運搬しながら口には柴巻を咥えている婦人の姿が記録されている。

さらに加納の歌集『柿園詠草』でも、熊野の風景として「いただき」をする女性の姿が詠まれている。

いただきに仙板のせてくださる子がうしろ手さむきなちのやませ
うちおける板目にきれしくろ髪をゆゆしと見つせこやなげかん¹²⁾

仙板（そまいた）を頭上に乗せて運ぶのは女の子であろうか。山道を下る後ろ手に那智山の寒風が追うように吹いている（筆者意識）。また、後者は、頭上運搬で毎日働く妻の黒髪は板目により切れている。その様子をいたいたしく嘆く夫の姿と解釈できる。

熊野山村の「いただき」は、薪，炭，材木板などを運ぶ過酷なものであったが，漁村においても「いただき」は存在した。

男が漁をする漁村では，魚の運搬，米，船荷の上げ下ろしは皆女子の仕事である。二間あまりのノウラギ，サメの類も頭に載せ，二俵の米苞（こめつつみ）を十字に頭に載せ，平然と歩いている。川への洗濯桶も糞桶も皆頭を利用する。6，7歳の童女も頭に載せている³。（堀内信『在郷日記』，明治3年（1870），筆者意識）

ノウラギとはクロカワカジキのことであり長い剣のような上あごが特徴である。ノウラギの食文化を持つことから熊野灘沿岸の熊野川河口付近の光景であると推定できる。

頭上運搬は，家事の必要のみならず女性が現金を稼ぐ労働でもあった。

三重県南牟婁郡古泊（ことまり，現熊野市磯崎町）集落では，女性たちが「いただき」労働で家庭の稼ぎ手になっているとの記録がある¹³）。木材や工事現場でのセメントなどの頭上運搬で日雇いや県外にまで出稼ぎに行った。良質のツバキの葉が手に入れば「何百枚も土産に持って来た」。老婆はツバキの葉を入れておく巾着袋を常時携行しており，娘たちはその袋をきれいな布で縫ってあげるのが楽しみであったと記されている。柴巻が日常生活の中で承認された習俗であったことがわかるエピソードである。



図3. 柴巻を吸う女性

出所：みえ熊野の歴史と文化シリーズ3



図4. 柴巻を吸う女性

出所：NHKアーカイブス

³杉山浩一郎『熊野の民俗と歴史』清文堂出版，1998年，202-204頁。

3-3. 現地調査

文献調査を裏づけ、かつ、現状調査を行うために現地調査を行った。

現地調査は和歌山県内の西牟婁、東牟婁地域内 21 集落で行った。田辺市(旧大塔村小川, 同木守), 古座川町(高池, 池野山, 平井, 潤野, 月野瀬), 串本町(旧古座町古座, 同姫), 串本町(串本, 檜野), 那智勝浦町(二河), 田辺市本宮町(合併以前の旧本宮町の集落。本宮, 武住, 皆地, 小々森, 下湯川, 湯峯, 小津荷, 野竹), 新宮市(旧熊野川町九重), すさみ町(椎平), 日高川町(高津尾)で聞き取りを行い, ツバキの葉巻の喫煙行動についての証言を収集した。同時に, 女性の労働について聞き取りを行った。また, 文献調査でツバキの葉巻習俗が確認された長崎県五島市三井楽地区で現地調査を実施した。さらに, ツバキの植生地として有名な東京都大島町にも現地調査を行った。

聞き取り内容は, 高齢者の思い出であり, 多くが昭和 30 年代頃までの話と推定された。インタビューで得られた内容は以下である。また柴巻の記憶については表にコンパクトにまとめた。(表 1)

①荷持(にもち)労働と女性の仕事

頭上運搬である「いただき」は大正時代にはほとんど見られなくなるとされるが, 荷持(にもち)と呼ばれた荷運びはその後も女性たちの仕事であった。熊野山間の主産業である炭, 杉や檜の皮, かづら, 薪, 製紙の材料である木枝, 養蚕の繭玉, 川の積み荷などを運ぶのである。

熊野で盛んだった木炭産業は, 熊野炭として江戸を大消費地としていた。熊野川は奈良県の大峰山系を源とし奈良県, 三重県を蛇行しながら和歌山県に入り熊野灘へと流れる一級河川である。その両側が東牟婁郡, 南牟婁郡となる。また古座川は本宮町, 旧大塔村, 古座川町の接点に位置し, 西牟婁郡, 東牟婁郡の最高峰である大塔山を源とし熊野灘に流れる二級河川である。これらの流域奥部の山で焼かれた炭は河川を利用して川舟により河口まで運ばれた。

荷持は, 炭焼き窯から川の船着き場まで牛車の入らない山道を炭を担いで歩いて運び, 川舟に積み込むのである。この荷運びを女性が担った。

- ・炭焼きの生活は山から山へと一家で移動をする生活だった。子どもは幼いときは木につないで育てた。炭俵を 2 俵(1 俵は 15 kg)背中に背負い, その上に子を乗せて, 炭窯のある山から里まで運んだ。(古座川町の女性の話)
- ・小学校高学年の時から炭を 2 俵担いで山道を何往復もした。(本宮町の女性の話)

荷を運んだ帰りには, 決して空荷で帰らず, 日用品などを調達し担いで帰ったという。炭焼きは山主から炭焼き窯を持つ権利を得て炭を焼いたが, 炭焼きは窯周辺のカシな

どの原木を求めて家族共々山から山へ移動をする民であり、女性はその不安定な生活の中で子育てもした。男性の仕事には木材や炭の運搬をする川舟の仕事もあった。これは夜中の未明から船に乗り、川を下り、帰りには川を遡るため冬でも水の中に入って船を曳くという過酷な仕事であった。子どももまた、学校に行くのに炭を担いで行き、集積場に炭を下ろすと校門をくぐったという。狭隘な耕作地しかなく生活の厳しい熊野の山村では、木炭生産が人々の生活を支えていた（図5・図6.）。

また、山には鉾山や山林労働者が入っており、これに関連した荷物を山中の現場まで運ぶ強力（ごうりき＝荷運び）は女性の仕事だった。川舟が着くと積荷を背負い運んだ。



図5. 炭焼窯（古座川）

出所：北海道大学北方生物圏フィールド科学センター



図6. 木材の流送（古座川）

出所：北海道大学北方生物圏フィールド科学センター

養蚕の季節には女は子どもの時から忙しく立ち働いた。春蚕，夏蚕（初秋蚕），晩秋蚕，晩々秋蚕と4回飼育する家も，年に2回，3回飼育の家もあった。農作業の合間に桑摘み，桑の葉を刻んでの餌やり，成長に合わせた棚の移動と掃除など繊細な飼育に休む間がなかった。飼育の時期が近づくと「ああ，またお蚕さんがやってくるなあ」と業者が持ち込む蚕に母子は身構えた。殺気だつほどの多忙な日々が始まった。

- ・繭玉は5貫（約20kg）程入る竹紙の袋に1軒に4，5袋は出し，女性たちはその袋を背負い峠や幾つかの集落を越え，片道4時間かけて町の間屋まで運んだ。帰りには醤油や日用品を調達して運んで帰った。空荷では帰らなかった。わらぞうりは一日でダメになるので夜はぞうりづくりだった。（旧大塔村の女性の話）
- ・繭を乾繭（かんけん）場まで運ぶ荷運びは女性の仕事だった（本宮町の男性の話）

乾繭とは，生繭を乾燥させることである。

このように「荷持」は女性の仕事であった。同時に、炭焼き、養蚕、しいたけづくりなど生産の部分も女性が担っていた。また山に入って紙の原料である雁皮（がんび）採りも行った。雁皮は収穫するとすぐに皮をむく処理をしなければならないが、その作業の間にも「母は柴巻を啜っていた」（旧大塔村の女性の話）とのことであった（図7）。

山村では、男性は田植えが終わると遠くまで山仕事に出稼ぎに行くか、炭や木材の流送の仕事に泊まり込みで行くため、家まわりの仕事は女性に委ねられた。田畑、山仕事、牛を飼い、草刈り、かいば作りも女性の仕事だった。荷持ちや雁皮採りなど「お金になる仕事」にも励んだ。日常の中で女性は「いつも薪を背負っていた」との記憶の中の姿も語られた。



図7. 雁皮

出所:筆者撮影

②ツバキの柴巻に関する記憶

ツバキの葉を使用した柴巻の喫煙行動について、熊野エリア（西牟婁地域、東牟婁地域）および長崎県五島市三井楽地区、東京都の伊豆大島で聞き取り調査を行った。

証言者（65才以上が中心）の祖父母の時代までの習慣であり、喫煙経験者は存命しておらず、収集できる情報に限界があったが、柴巻習俗が存在していたことが確認された。

インタビュー調査は、2016年6月から2017年3月までの間に実施した。これらはインフォーマントの地元における柴巻喫煙に関する記憶の証言である。生年、性別、記憶にある集落を示した。ポイントに下線を引いた。情報を整理し表1にまとめた。

【証言1】昭和5年（1930年）生まれ、男性、田辺市（旧大塔村鮎川）

祖母がよく吸っていた。ツバキには味があると言った。祖父はキセルを腰に付けていた。旧家のおばあさんは家でも吸っていた。「巻く」ことは集中にもなるし、間をつなぐことになっていた。仕事をしている時や危険な仕事の前にちょっと一服して心の整理となったようだ。おばあさんらが話し合いをする時には、ツバキを巻きながら話に集中していた。焚き物を背に背負っていても、田畑仕事の間でもしょっちゅう吸っていた。きざみは「わかば」だった。配給があれば乾かしてカラカラにしてもんで粉にしていた。

【証言2】昭和7年（1932年）生まれ、女性、田辺市（旧大塔村）木守

（*木守は昭和31年大塔村発足以前は三川村に属した）

祖母も父も吸っていた。父はキセルでも吸った。ツバキの方がおいしいと言っていた。ツバキの柴（葉）は石垣の所に置くと湿気があるので保存できた。ツバキの柴は年中切らさないようにしていた。山には年中ツバキがあった。山で大きい葉を採ってくると祖母も父も喜んだ。ツバキだけしか吸わなかった。母の時代の女性は吸わなかった。

【証言 3】 昭和 10 年(1935 年)生まれ、女性、古座川町平井

すさみ町生まれであるが、すさみでは吸っているのを見なかった。昭和 35 年頃結婚し平井に来たが、姑がしょっちゅう吸っていた。ツバキの生葉にきざみを巻いていた。

【証言 4】 昭和 20 年(1945 年)生まれ、男性、古座川町平井

小学校 3, 4 年生の頃「ツバキの葉を取って来いよ」と父によく言われた。父が好きだった。きざみは「みのり」。紙袋に入ったきざみを買った。井野谷(平井近村で明治時代に廃村)でタバコを作っていた。昭和 30 年頃までの慣習だと思う。ツバキはつつるした方を内側にして吸う。吸う直前に葉をあぶり、柔らかくして刻みを巻いて吸う。おじいさんもおばあさんも吸った。お茶の大きな葉でも吸っていた。キセルに刻みを入れて吸うようになると葉っぱでは吸わなくなった。

【証言 5】 昭和 43 年(1968 年)生まれ、女性、古座川町潤野

20 歳の頃、町内のおばあさんが吸っていた。

【証言 6】 昭和 17 年(1942 年)生まれ、女性、古座川町池野山

祖母の時代に吸っていた。父の乳母(高池出身)も吸っていた。乳母の話では、昔の池野山は山道で背中の父(赤ん坊の頃の)が泣き出すと、少女であった子守りの乳母も山道で泣きたくなった。そうすると祖母がツバキにきざみを巻き火を点けてくれ、それで元気が出たということである。

【証言 7】 昭和 21 年(1946 年)生まれ、女性、古座川町高池

近所の着物の仕立てをしていた粹なおばあさんが、着物をだらしなく着て吸っていた。町の人も吸っていた。高池は店や映画館もある繁華街だった。

【証言 8】 昭和 23 年(1948 年)生まれ、男性、串本町(旧古座町)上ノ丁

小学生の頃、近所のおばあちゃんが吸っていた。母の世代は吸っていなかった。

【証言 9】 65 才くらい(生年不詳)、女性、串本町(旧古座町)姫

ツバキの葉巻は聞いたことがある。

【証言 10】 昭和 18 年(1943 年)生まれ、男性、串本町上浦

祖母がしょっちゅう口に啜えて吸っていた。近所の漁師のおばあさんで 2 人くらい吸っている人を見た。ツバキはどこの家にもあった。

【証言 11】 昭和 22 年（1947 年）生まれ，男性，那智勝浦町二河

地区の人は年がら年中吸っていた。葉はキセル代わりで，つめるのはきざみ。ヨモギの葉を乾かして揉んだもので吸った。ツバキの葉は分厚く油気があるのでやわらかくマイルドになり，独特の味があった。学校帰りの道でいつも吸っているじいさんがいた。タバコ屋にはきざみが大袋に入って売っていた。キセルで吸っても美味しくないと言っていた。学生時代に学校でツバキの柴巻をこっそり吸った。きざみは「ひびき」や「いこい」。きつく吸うと火の粉が入ってきた。タールがきつかった。

【証言 12】 昭和 40 年（1965 年）生まれ（推定），男性，古座川町高池

学生時代，ツバキの葉を集めておばあさんに売って小遣いかせぎにした。

【証言 13】 昭和 28 年（1953 年）生まれ，男性，古座川町月野瀬

竹の筒にヨモギの乾燥したものをつめて悪戯で吸った。

【証言 14】 昭和 24 年（1949）生まれ，男性，新宮市（旧熊野川町）九重

小学校低学年の思い出。祖母が吸っていた。市販のきざみを入れていた。吸っている人は男勝りのイメージが残っている。吸うときのツバキのジリジリ焼ける音が印象的。紙煙草より濃い。

【証言 15】 昭和 13 年（1938）生まれ，男性，串本町檜野

祖母が吸っていた。ツバキの生葉に巻いていた。障子紙にも巻いて吸っていた。

【証言 16】 75 才くらい，男性，串本町椎平

数軒の谷間の集落だが，祖母が吸っていた。生業は水田ほか農業。草取り場（山）があったが，現在は山になってしまっている。

【証言 17】 昭和 16 年（1941）生まれ，男性，本宮町武住

明治 30 年代生まれの祖父の姉が吸っていた。亡くなる直前まで吸っていた（昭和 40 年頃）。常緑で年中あるカシの葉で巻いた。生葉をちょっと炙って，葉の口元にあたるところをひしゃげてチュウチュウ吸っていた。家業の雑貨屋さんの店番をしながら吸っていた。昭和 40 年頃に亡くなる直前まで吸っていた。カシの葉は独特の香りがある。ヨモギを乾燥させて吸う人もいた。子どもが葉を取ってきておばあさんにあげた。

【証言 18】 昭和 12 年（1937）生まれ，男性，本宮町皆地

キセルを手に入れる前は男性も柴巻を吸っていた。キセルの胴を切って竹をはめて長くして吸っていた。祖母はくど（かまど）で薪をくべながら吸っていた。

【証言 19】昭和 7 年（1932）生まれ，男性，本宮町小々森
地区では皆，カシの葉で吸っていた。

【証言 20】昭和 14 年（1939）生まれ，男性，本宮町下湯川
地区ではカシの葉で吸っていたが，本当に旨そうに吸っていた。

【証言 21】昭和 10 年（1935）生まれ，男性，本宮町湯峯
祖母が吸っていた。

【証言 22】85 歳くらい（推定），男性，本宮町静川
小学生の時，同級生の母親が年中ずっと吸っていた，何時も口に咥えていた。カシの葉で巻いていた。吸い終わると残りの粉を手のひらに受けてそれをなめていた。残りの火玉を次の煙草に点けていた。長生きされた。海岸線の地区や十津川村（奈良県）ではツバキの葉巻だ。

【証言 23】昭和 23 年（1948）生まれ，男性，本宮町小津荷
祖母が吸っていた。明日は雨だという前日にはカシの葉を取り置きしていた。

【証言 24】昭和 7 年（1932）生まれ，男性，本宮町野竹
祖母は地区の長（おさ）で，カシの柴巻を口に咥えて慣習のことなどの相談にのっていた。戦後の配給の時代にはヨモギ，フキの葉を刻んで混ぜていた。吸い終わりには，吸い口に残ったタバコの溜まりを葉ごとバリバリ食べていた。

【証言 25】昭和 30 年（1955）生まれ，男性，日高川町（旧中津村）
ツバキの葉で巻いて祖母（日高郡美浜町三尾出身）が吸っていた。小学校低学年の頃（1962，3 年頃）の記憶。祖母は農業ではなく，家事の合間やくつろぐ時に吸っていた。

【証言 26】昭和 35 年（1960）生まれ，男性，長崎県五島市三井楽
祖父母がツバキの葉巻を吸っていた。祖父母は大正生まれで，祖母はタバコを作っていた。ツバキの葉は香りよく火にも熱くない。お茶の葉をきざみにして巻いて吸った。

【証言 27】昭和 5 年（1930）生まれ，男性，五島市三井楽柏

柏地区には10人くらい吸っていただろう。男女とも吸っていた。啞えたまま仕事をしていた。香りも臭いも他の葉に優りよい。縄仕事など手作業しながらも常に啞えていた。百姓仕事をしながら吸っている女性が多かった。

【証言 28】 昭和14年(1939)生まれ、男性、五島市三井楽柏

曾祖母の世代で見た。ツバキの葉に進駐軍関係のシケモクをばらして巻いていた。野良仕事の休憩に吸っていた。このあたりの防風林は全てツバキの木。

【証言 29】 昭和35年(1960)生まれ、男性、五島市三井楽柏

小学校低学年の時、祖母が吸っていた。農作業の休みにツバキの葉を取って吸っていた。家の中では吸っていなかった。祖父はキセルで吸っていたが次第に紙煙草に変えた。

【証言 30】 昭和10年(1935)生まれ、女性、五島市三井楽柏

祖父母がツバキの葉っぱでキリキリ巻いて吸っていた。嫁は吸わない。

【証言 31】 大正14年(1925)生まれ、男性、五島市三井楽濱ノ畔

祖母、伯母が吸っていた。伯母は身体の大きな主婦で、器用に葉を巻きジュルジュル汁を出しながら吸っていた。配給になるとヨモギを干したのを混ぜて吸っていた。三井楽の人は皆吸ったのではないか。男性はキセルで吸うが、女性は葉を巻き吸っていた。

調査地の本宮町は2005年の市町村合併で田辺市の一部となった旧本宮町である。熊野本宮大社が立地する古い歴史ある地域であり、北を果無山脈、南を大塔山系と二つの1,000m級の山脈に囲まれ、寒暖の差が烈しく生活条件が厳しい山村である。本宮町の集落ではカシの葉を用いているのが特徴的であった。しかし、大塔山により接する旧大塔村、古座川町の山間部、熊野灘沿岸地域ではツバキの葉を使用していた。五島市の三井楽地域でもツバキの葉を使用していた。

これらのツバキは日本に自生する一般的なヤブツバキである(図8, 図9)。また、柴巻に関する証言者らの記憶により再現した葉の巻き方も示した(図10, 図11¹⁴)。

柴巻は香りよく旨いと言われ、きざみは、市販のものにヨモギや茶、フキの乾燥したものを混ぜ込んでいた。葉はツバキ、カシの他、お茶の葉、という語りもあった。



図 8. ヤブツバキ

出所:筆者撮影



図 9. ヤブツバキの葉 (左) カシの葉 (右)

出所:筆者撮影



図 10. 柴巻の巻き方

出所:筆者撮影



図 11. キザミを入れて巻く

出所:農文協

③五島市三井楽, 伊豆大島

三井楽集落は福江島北東部の半島に位置し、集落の最北部の柏港は遣唐使船が最後に寄港して水を積み込んだ場所である。組により組織的に捕鯨を行う方法は、徳川時代初期には紀州, 土佐, 北九州で行われ, 三井楽もそのひとつであった。

三井楽における柴巻習俗は、熊野地域と同様に高齢者の記憶の中に残されていたが、郷土誌などにまとまった記述はなかった。三井楽は、日本耕地形の原初形と言われる円形の田畑, 円畑 (まるはた) を耕作地として持つ¹⁵⁾が、椿が数多く自生する当地の円畑の防風林にツバキは使用された。

三井楽半島の西方には東シナ海が広がり、柳田国男は「亡き人の往って住むといふ。此世の外の隠れ里, 遙けさを意味する大昔の根の国であり…」と記述している¹⁶⁾。熊野もまた「根の国」といわれ、熊野灘ははるか浄土に向かう聖地とされていた。

三井楽のインフォーマントの 1 人の名字は「白髭」であった。鯨の身体の一部を示す名字であり、五島市内では他に見られない名字という。しかし、白髭家の子孫に紀州とのつながりについて覚えがなく、また太地町には、「白髭さんはいない (地元住民)」と

のことで、紀州と三井楽との人的なつながりは確認できなかった。しかし、古式捕鯨法の発祥の地である和歌山県の太地浦から長崎など九州に捕鯨法の伝授がされたとの歴史がある⁴。

ツバキの自生地として有名な伊豆大島は、古くより椿油などを産業としており、ツバキの島として多くの観光客が訪れている。また若い女性である「あんこ」の頭上運搬労働は古くから記録されている。しかし島内で聞き取りを行った結果、ツバキの葉による喫煙行動の記録も記憶も皆無であった。

表 1. 柴巻に関する証言

	証言者	誰が	どこで	何に巻いたか	いつ頃目撃
1	男 s5(86)	祖母, 近所の老女	旧大塔村鮎川	ツバキの葉	s10-30s
2	女 s7(84)	祖母, 父	旧大塔村木守	ツバキの葉	s10-30s
3	女 s10(81)	姑	古座川町平井	ツバキの葉	s35-
4	男 s20(71)	父	古座川町平井	ツバキの葉	s20-30s
5	女 s43(48)	町内の老女	古座川町潤野	ツバキの葉	s63
6	女 s17(74)	祖母, 父の乳母	古座川町池野山	ツバキの葉	大正-昭和
7	女 s21(70)	近所の老女	古座川町高池	ツバキの葉	s20-30s
8	男 s23(68)	近所の老女	旧古座町上之丁	ツバキの葉	S20-30s
9	女 ≒ (65)		旧古座町姫	ツバキの葉	聞いたことある
10	男 s18(73)	祖母, 近所の老女	串本町上浦	ツバキの葉	s20-30s
11	男 s22(69)	近所の老人, 自分	那智勝浦町二河	ツバキの葉	s20-30s
12	男 s40(51)	近所の老女	古座川町高池	ツバキの葉	s50s
13	男 s28(63)	自分	古座川町月野瀬	竹の筒	s40s
14	男 s24(68)	祖母	旧熊野川町九重	ツバキの葉	s30
15	男 s13(79)	祖母	串本町櫻野	ツバキの葉	s20-30s
16	男 ≒ (75)	祖母	すさみ町椎平	ツバキの葉	
17	男 s16(76)	大祖母, 近所の老女	本宮町武住	カシの葉	s20-40s
18	男 s12(81)	近所の老人	本宮町皆地	カシの葉	キセル登場まで
19	男 s7(85)	地区の人	本宮町小々森	カシの葉	
20	男 s14(78)	地区の人	本宮町下湯川	カシの葉	
21	男 s10(82)	祖母	本宮町湯峯	カシの葉	s10-30s
22	男 ≒ (85)	同級生の母	本宮町静川	カシの葉	s10s
23	男 s23(69)	祖母	本宮町小津荷	カシの葉	s30s
24	男 s7(85)	祖母	本宮町野竹	カシの葉	s10-30s
25	男 s30(62)	祖母	旧中津村/美浜町	ツバキの葉	s30s 後半
26	男 s35(57)	祖父母	長崎県五島市三井楽	ツバキの葉	s40s
27	男 s5(87)	住民	五島市三井楽柏	ツバキの葉	
28	男 s14(78)	曾祖母	五島市三井楽柏	ツバキの葉	s20s
29	男 s35(57)	祖母	五島市三井楽柏	ツバキの葉	s40s 前半
30	女 s10(81)	祖父母	五島市三井楽柏	ツバキの葉	s20s
31	男 T14(92)	祖母, 伯母	五島市三井楽濱ノ畔	ツバキの葉	s10s

2016年6月～2017年3月の聞き取り_柴巻に関する証言

*文頭の s=昭和, 証言者の数字は生年(年齢)

出所:筆者作成

⁴1606年、太地の豪族、和田頼元は組により組織編成した古式捕鯨を創始した（頼元の末裔、太地鯨方宗家和田家の家人、和田千明氏(和歌山県太地町)への聞き取り）。

3-4. 柴巻の分布

以上の聞き取りおよび文献調査より、柴巻の習俗が確認された場所をグーグルマップ上に整理した¹⁷⁾。

マップ上の赤と緑マークは柴巻に関する証言が得られた地域を集落レベルで示した。赤色はツバキの葉、緑色はカシの葉による柴巻が確認された集落である。黄茶マークは文献で柴巻について記述のあった地域である。峠など具体的な目撃記述のあった場合は、その峠上にマーキングを行った(図 12)。

東は三重県志摩町沿岸地域から、和歌山県への熊野灘沿岸地域、和歌山県東牟婁郡、西牟婁郡の内陸部のうち潮見峠以西から田辺市本宮町、和歌山県北山村、奈良県十津川村、兵庫県の淡路島東南海岸部⁵⁾、さらに西は五島列島の長崎県五島市三井楽地区までの45地点51情報が確認された(図 13)。



図 12. 熊野における柴巻習俗の地点

出所:筆者作成



図 13. 柴巻習俗の広がり

出所:筆者作成

3-5. 生活の中の嗜好品

本研究の聞き取り調査から得られた、熊野の女性たちが生活の中に取り入れた嗜好品とそれに関わる生活の姿について以下に抜粋する。文末の()内は代表的な聞き取り源であるが、同様の話は熊野地方各地にあった。

⁵⁾ 淡路島東南海岸部に柴巻があったとする記述は、杉山浩一郎『熊野の民俗と歴史』128頁にあるが、集落を特定できなかった。

なれずし 旧熊野川町から奈良県十津川に至る、熊野川を遡る山間の地域における保存食で主としてサンマを使う。アユの場合もある。酢を使わず、魚を塩と米飯で乳酸発酵させたもので、強烈なおみやご飯の腐敗臭で独特のものであるが、この土地の人には美味な嗜好品である。暮れになると樽一杯のサンマを浸け、夜にちびちびと食べるのが冬の間の愉しみであった。（旧熊野川町九重，同日足での聞き取り）

こんこ 大根の漬物，たくあんのことである。日常食に必須で井に山盛りに出された。お茶うけにもなった。赤ん坊や幼子にはおしゃぶり代わりにしゃぶらせていた。家庭では晩秋に4斗樽（72リットル）2杯の大根を漬け込んだ。小学校高等科は寮生活で，月曜日の朝に米とこんこだけを持ち，暗いうちから家を出て山越えで2時間かけて学校に戻った。雪の日も藁草履で峠を越えた。つらかった。（旧大塔村木守での聞き取り）

茶 お茶は自家栽培の自家製である。熊野山間の人々は「お茶に執着がある」。5月になると1年分のお茶をつくる。新芽を摘み，炒り，熱いうちに筵（むしろ）の上に広げ手でしっかり揉み込み，天日に干すのが工程。一番茶，二番茶，番茶と愉しみ，夏には冷たくして客にも接待した。梅干しを添えた。もうすぐ80歳になるが，今も緑茶だけでコーヒーも麦茶も飲まない（那智勝浦町色川，本宮町湯峯での聞き取り）

芋 熊野山間や沿岸地域には平地が少なく，急な棚田でわずかに米を作る。このため，「主食は芋」と語られるほどで，同時に芋は間食，嗜好品でもあった。サツマイモやサトイモを朝には大鍋にいっぱい茹で，一日中それを食べる。生芋を薄切りにして天日に干した干し芋も保存された。太地の台地にはサツマイモ畑が広がり収穫期には学校は休みになった。子どもも掘った芋を「ふご」に入れ，天秤棒で担ぎ家まで何往復も運んだ。芋の運搬は子どもにはつらいが，「母が水飴を作ってくれた。ほうろうの器に入った芋飴をお箸に巻きつけて食べた」。山間地域でも，娘時代には「おやつ」を求めサツマイモから飴を作った。「親から屑芋をもらい，茹でて袋に入れて汁を搾り，それを何時間もかけて煮詰め，型で固め，包丁で切り飴玉にしてなめた。女子が集まって一日がかりで作った」。甘い物が少ない時代，芋飴を口に入れた喜びが，60数年を経た今も彼女たちに強く残っていた。（串本町太地，旧大塔村小川での聞き取り）

おかいさん 米は貴重なため，日常は，沸かしたお茶で米を炊く茶がゆだった。少ない米を食い延ばす目的でもあるが，厳しい農作業の後にはのどの乾きを潤し，サラサラとどごしもよく，こんこのおかずで充分だった。しかし，すぐに空腹になり，1日6度も食したという。夏は冷えた茶がゆが美味しかった。さらに量を増やし味を楽しむためにサツマイモや山芋，ムカゴなど入れた。かゆ汁でそば粉やはったい粉（麦粉）を練っ

ておやつになった。また、サツマイモより甘くなる里芋をいれた茶がゆは「最高にうまい」とも語られた。紀伊半島ではこの茶がゆを「さん」づけで呼ぶ。(各地での聞き取り)

漬物 こんこが代表であるが、きゅうり、なす、かぼちゃ、たかな、芋の茎、梅干し、らっきょうなどを、塩漬け、ぬか漬けにして保存した。(各地での聞き取り)

酒盗(しゅと) 塩辛のことで酒の肴として愛された。カツオ、イカ、サエラ、アユなどの内臓をすごき、水洗いをよくして塩で漬け込む。(串本町、古座川町での聞き取り)

トチ トチはアクが強く下処理に大変手間のかかる食材である。「母はトチの実を布の袋に入れて谷川に1週間ほど浸けっぱなしにした後、天日に干し乾燥させた」。カラカラに乾燥すると何年でも保存でき、使う分だけ固い皮を剥ぎ、流水にさらしては木灰にまぶし、また水にさらすと、繰り返しかきをして調理した。長い時間をかけて、それは餅になった。キビもカシも同じく粉にされ保存された。(古座川町平井での聞き取り)

ニッキ 根を洗い生を嚼った。(古座川町平井、同月野瀬、旧大塔村小川での聞き取り)

クサギ虫 ガの幼虫で、クサギの木の内部で育つ。木の枝を切り中から取り出し焼くといへん香ばしい。昆虫食はハチの子なども語られたが、クサギムシは特に美味なものとして懐かしく語られた。(古座川町平井、同月野瀬、旧古座町での聞き取り)

その他、カヤ、シイなどの木の実、野イチゴ、イタドリ、マムシ酒なども語られた。



図 14. 嗜好品ともなった食材

左より、サンマの塩漬け(なれずしの前段階)、茶がゆ、サツマイモ、トチの実、クサギの虫
出所:筆者撮影

4. 考察

考察のポイントとしては2点あった。第1に、柴巻習俗の広がりについての地域間の関連性、第2に、柴巻習俗の次世代への継承性についてである。

① 柴巻習俗における地域間の関連性

柴巻習俗の分布における地域間の関連性を探るため宗教を調べた。宗教の伝播は生活文化への影響が大きく、柴巻も寺との関係で広まったと仮説を立てたためである。

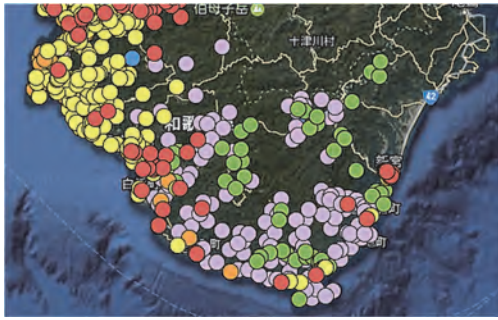


図 15. 寺マップ（和歌山県）

図 16. 柴巻地点における寺マップ（和歌山県外）

* 藤色：臨済宗 緑：曹洞宗 赤：真言宗 黄色：浄土宗 オレンジ：浄土真宗 青：天台宗
出所：図 14 中島敦司「和歌山県の寺マップ」， 図 15 筆者作成

図 15 は和歌山県南地域の寺を宗派別にマッピングしたもの¹⁸⁾， 図 16 は和歌山県外の柴巻習俗が確認された地域のマップ上に， その地域の 32 寺院すべての宗派を調べマッピングしたものである。図によると和歌山県南には臨済宗が多く， 三重県の志摩半島では， 柴巻が確認された 7 集落において曹洞宗が 6 寺院， 臨済宗が 4 寺院であった。また， 長崎県式見集落は浄土真宗であり， 当地は熊野の漁師が流れ着いて漁場を拓いたとされているが， 熊野沿岸部の浄土真宗の寺院はすさみ町にわずかに 2 寺院あるだけである。長崎県三井楽集落の寺は浄土宗で， 九州に捕鯨を伝えたとする太地町は臨済宗の寺であった。淡路島東南部地域は， ほとんどが真言宗となっており， これは和歌山県北東部の高野山からの伝播の影響と考えられる。

ここまでの調査では， 柴巻習俗の伝播と寺宗派の分布との関連性は確認できなかった。

② 柴巻習俗の次世代への継承性

柴巻は証言者らの祖母世代， つまりほぼ明治生まれまでの女性の習俗であることがわかった。「母」は吸っていなかった。なぜ「母」の世代へ柴巻喫煙が継承されなかったのだろうか。今回の調査からわかった柴巻喫煙者との最後の接点は， 和歌山県古座川町の 1980 年代末であった。

柴巻喫煙に関するインフォーマントの最高齢は 92 歳（大正 14 年生まれ）であり， 彼の伯母が吸っていた。伯母の生年は明治 30 年頃かそれ以前であろうと推察される。一方， インフォーマントの中で最も若いのは和歌山県古座川町の女性， 47 歳（昭和 43 年生まれ）の証言である。目撃したのは「20 歳の頃」とのことで昭和 63 年となる。喫煙者は「近所のおばあさん」で生年は明治 35 年前後から明治末であろうと推察される。

目撃された喫煙者らの次の世代である， 大正初期の生まれの者が成人するのは昭和 5 年以降である。日本が昭和恐慌を経て戦争へと向かっていく時期である。昭和恐慌の影響は中央から離れた熊野の山村にまで及び， 失業や飢餓などの深刻な状況が町村誌など

に記録されている。若い女性が喫煙を習慣化する余裕は、世相的にも経済的にもなかったと推測される。

また昭和初期以降は、喫煙手段はキセルから紙巻き煙草へと移りつつあった⁶。時代は戦時体制に至り、紙巻き煙草を吸うことは、当時の農家女性にとって金銭的にも文化的にも考えられなかったはずである。

5. 結論

柴巻の習俗は、紀伊半島の沿岸地域および山間地と長崎県五島市三井楽集落にあったことが聞き取りから裏づけられた。柴巻習俗の伝播は、紀伊半島では熊野灘沿岸を伝ってのつながりが考えられ、長崎県へはおそらく捕鯨や漁業者により伝えられた。また淡路島東南部も、熊野灘から紀伊水道に至る漁業でのつながりと考えられる。

熊野山間地への伝播については、熊野灘に注ぐ熊野川、古座川、日置川の中上流部に至る山村は、木材や炭、さまざまな物資を運ぶ川の流通で下流とつながっていた。集落間の横の関係は、街道や峠越えで流通の道としてつながっていた。また、熊野川、古座川、日置川の源は紀伊山地に発し、東牟婁郡、西牟婁郡と北方の日高郡とはこの深い紀伊山地に阻まれて流通圏にはなかったと考えられる。日高郡以北の柴巻習俗は文献上でも確認に至っていない。聞き取りでは1名の柴巻喫煙が確認されたが調査人数が希少のため習俗として確定はできない。熊野地域以外の柴巻の広がりは今後の課題とする。

熊野の女性は、重量物を運ぶ頭上運搬や荷持ちなどの荷運びで「辞職峠」と呼ばれるほどの険しい峠を往復し、さらに田畑仕事、牛の世話、薪とり、養蚕、山仕事など休む間のない厳しい労働の日々であった。ツバキやカシできざみを巻いた柴巻は、ずっと口の端で噛んだまま吸うため、キセルで吸うように仕事の手を休める必要がなく、柴巻は細かい手仕事や力仕事に休む間もない女性には都合がよかった。

また嗜好品について特徴的なことは、発酵したすしや茶、芋など日常食と同じ食材が、厳しい労働を潤す嗜好品の役割を果たしていたことである。自給自足の限られた食材の中で、命をつなぐ食は、嗜好品ともなっていたのである。たまに昆虫などもあったが、日常の嗜好品は日常食の延長にあった。こうした中で、柴巻は突出した嗜好品であった。

吸い終わりのタールのたまりを啜った、吸い口の葉までもばりばりと食べた、年中口に咥えていた、との証言から、女性たちは柴巻に強い嗜好と依存性を持っていたのではないかと考えられる。辺境の辺鄙な厳しい環境の中で、過酷な労働に明け暮れた女性にとって、柴巻は習慣として根づいた嗜好品だった。形状的には小さく目立たず、いつでも簡単に手に入る葉であり、たしなみの面からも女性には都合が良かった。ゆえに柴

⁶ JT「たばこと塩の博物館」

<https://www.jti.co.jp/Culture/museum/collection/tobacco/t21/index.html>

巻は農山漁村の生活に馴染む嗜好品として、厳しい暮らしの中での愉しみの位置を確保していた。

柴巻習俗の多くは 1970 年頃(昭和 45 年)にはなくなっていた。最も遅くは 1980 年代後期まで古座川町の一部に残っていたことがわかった。この後に柴巻の目撃はなくなる。これについては、この頃にはキセル喫煙が姿を消していたこと、喫煙習俗が明治生まれ以降の世代に継承されなかったこと、さらに、身近な地域資源を活用した嗜好の文化自体が衰退しつつあった時期と重なったことなど、複合的な要因があったと分析される。

地域の素朴な資源を活用した嗜好品は、過激な労働が姿を消し、金銭による消費行動が主流となっていく時代背景の中で生き残らなかったのである。

6. 引用文献

- 1) 湯崎真梨子, 中島敦司, 那智勝浦町高津気における水管理と共同性に関する考察, 歌山地理, 2010, 29, 61-76 頁。
- 2) 梅原猛『日本の原郷 熊野』, 新潮社, 1994 年, 101 頁。
- 3) 「豊原村郷土誌」, 『三川村郷土誌』 1930, インターネット版, 田辺市役所, 2013
<http://www16.plala.or.jp/mikawamura/kyodoshicontents/index.htm>.
- 4) 湯崎真梨子, 中島敦司『熊野の廃校』, 南方新社, 2015 年, 166 頁。
- 5) 杉山浩一郎『熊野の民俗と歴史』清文堂出版, 1998 年, 202-204 頁。以下, 『熊野詣紀行』 『柿園詠草』 『三山紀略』 『南遊志』 『在郷日記』 からの引用も同誌参照。
- 6) 三重県「観光三重」, 佐藤春夫「山妖海異」, 『新潮』, 53 巻 3 号, 1956 年。
- 7) みえ熊野の歴史と文化シリーズ 3 『熊野の自然と暮らし』
<https://www.kankomie.or.jp/spot/mBungaku/higashi/01.html>.
- 8) 井上円了『日本周遊奇談』 第 269 話, 博文館, 1911, 231-232 頁。
- 9) 谷川健一 『列島縦断 地名逍遙』, 富山房インターナショナル, 2010, 83 頁。
- 10) 南方熊楠『南方外伝』, 岡書院, 1926, 376 頁。
- 11) 野村益三監督映画「熊野路」, 1935 年。NHK 和歌山「わかやまアーカイブス」, 2015 年 12 月 8 日公開。
- 12) 加納諸平『柿園詠草拔萃傍註』, 松村亮, 1897, 22-23 頁。
- 13) 杉山浩一郎『熊野の民俗と歴史』清文堂出版, 1998 年, 68-73 頁。
- 14) 『聞き書 和歌山の食事』農文協, 1989, 282 頁。
- 15) 三井楽町『三井楽町郷土誌』, 2011 年, 13 頁。
- 16) 谷川健一『列島縦断 地名逍遙』, 富山房インターナショナル, 2010, 33 頁。
- 17) <https://www.maps.google.com/>
- 18) 中島敦司「和歌山県の寺マップ」。

7. 英文アブストラクト

Labor and pleasure for women living in rural as seen from the cigar culture
and favorite food and beverage in Kumano, Japan

Mariko YUZAKI

Wakayama University

Shibamaki means the old custom to use tree leaves as smoking pipe in Kumano region, Japan. It was a unique custom for women living in rural in Kumano, especially in the southern part of Kii Peninsula.

In this study, it will be clarified the distribution of Shibamaki custom to draw the points on digital map, where were confirmed this smoking custom by literature survey with interview to old people living in rural in Kumano. In addition, as a background of smoking, clarified women's labor and daily life. And, the information of favorite food and beverage was analyzed as one of the pleasures in daily life.

Shibamaki custom were found to be distributed from the Mie prefecture to the Kumano Nada coastal area of Wakayama prefecture, the mountain villages in middle upper basin of the river flowing in the Kumano Nada, part of Nagasaki prefecture in Kyushu and Awajishima in Hyogo prefecture. It was analyzed that Shibamaki custom propagated by fishery, traffic on river and old way.

The Kumano area is a remote region with few cultivated land, and female labor was severe. Luxury items were few, but Shibamaki were used habitually to addict as a luxury item. It was able to do farm work while being kept and raised the preferences and dependency of women as enjoyment in the days of labor. This custom was the end of the generation born in the Meiji era. And it disappeared in the era when money became mainstream.